

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研究会有明病院での国内外科研修を終えて

弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座

鍵谷 卓司

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修制度により、がん研究会有明病院で令和4年9月12日から9月16日までの1週間の期間で施設研修をさせていただきました。弘前大学消化器外科学講座の鍵谷卓司と申します。このような機会を与您いただきました日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめとした臨床外科学会役員・委員の皆様にご挨拶申し上げます。また、非常にご多忙の中、私の研修を温かく迎え入れて下さったがん研究会有明病院大腸外科のスタッフの先生方、レジデントの先生方に心より感謝申し上げます。

私は、2011年に弘前大学を卒業し、市立函館病院での初期臨床研修を終え、弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座に教室員として入局し、大学院卒業後に関連病院で勤務した後、2021年10月より現教室の下部消化管グループに配属となりました。個人的にはロボット支援下直腸切除をより高いレベルで実施したいと考えており、日々の研鑽を行っております。そのような折、今回、国内でも有数の診療件数・手術件数を誇る、がん研究会有明病院での腹腔鏡手術やロボット支援手術を研修させて頂きたいと考え、応募させて頂きました。

研修内容として、主に手術症例を中心に見学させて頂きました。COVID-19の流行で、手術件数が全国的に減少している中、短期間の研修で貴重な症例を見学させて頂くのは大変忍びなかったのですが、研修期間中の手術件数は腹腔鏡手術が5件、ロボット支援手術が6件行われておりました。症例数はやはり国内屈指の件数でした。また、手術の時間が非常に速いことや、その中でスタッフの先生方とレジデントの先生方との間での丁寧な手技指導やディスカッションも十分になされており、診療面のみならず教育面でも質の高い手術が徹底されていると感じました。地方の関連病院で勤務することが多かった私にとって、ハイボリュームセンターでのこのような診療環境を体験することはとても貴重な経験でした。カンファレンスで提示される患者さんも、全国各地から紹介されており、切除不能と他院で判断されてしまい、セカンドオピニオンで来院された患者さんがいらっしゃるなど、がん治療の最後の砦として診療にあたる先生方の覚悟と度胸を垣間見ることができました。自分自身と同じ世代のレジデントの先生方が互いに切磋琢磨し合い、高いレベルの手術を実践している姿を間近に見学させて頂き、自分も負けずに日々の研鑽を行わなければならないと刺激を受けました。

私は、現在大腸分野での内視鏡外科技術認定医の取得をまず目標としておりますが、トップクラスの技術を誇るがん研究会有明病院大腸外科の手術やチーム医療、教育環境を経験できたことは、非常に貴重で素晴らしい経験でした。地域性や診療体制は違うものの、そのような姿勢を参考として、日々の診療に努めなければと自覚いたしました。今後の外科診療に活かして参りたいと思います。

最後に、本研修に私をご推薦いただきました袴田健一教授、お忙しい中、不在期間中の業務を負擔していただくことになるにも関わらず私を快く研修に送り出してくださった、弘前大学消化器外科学講座の皆様がこの場を借りて深く御礼申し上げます。日本臨床外科学会の国内外科研修の報告とさせていただきます。